

瀬戸内海から、淀川、宇治川を上って、大津へともどって来ました。最後に琵琶湖の旅をして、小川村の土を踏んだのは、約半月後でした。

⑬**与右衛門**「お母さん、与右衛門は、今度こそ本当にもどって来ました。」

母「与右衛門、信じてよいのですか。」
与右衛門「これからは、私はお母さんといっしょに暮らせることになりました。」

母「与右衛門、こんなにうれしい日が来ようとは。」



お母さんは、感激のあまり涙がはらはらと流れて、続く言葉も出ません。細い両腕が与右衛門さんを抱きしめました。与右衛門さんの両目から、涙があふれて止まりませんでした。この時、与右衛門さんは二十七歳、お母さんの市（いち）さんは五十七歳になっていました。

与右衛門さんは、まもなく京都の友人の家に行き、大洲の家老に手紙を書きました。お許しをもらわないで、近江にもどったおわびと、どのようなおとがめにも従う覚悟である

ということを書いて、出しました。しかし、殿様は、脱藩の事情がよく分かっていたので、追っ手を出すことはありませんでした。与右衛門さんは、安心して小川村へ帰りました。命を懸けて小川村に帰った与右衛門さんは、ようやく母のそばで、のびのびとした生活ができることを幸せに思いました。

(おしまい)

藤樹記念館通信 ⑪

『日中友好交流のシンボル』

中江藤樹記念館北側に位置する

『陽明園』

理事 武田 基裕

皆さんは、『近江聖人中江藤樹記念館』の北側に隣接する全国的にも珍しい中国式庭園の「陽明園」をご存じでしょうか。あの朱色のどこか中国様式の立派な建物であった「陽明亭」が池の中ほどにたたずんでいた庭園です。この「陽明亭」は、老朽化による倒壊の危険があったため平成三十一年一月に解体しましたが、陽明園には市内外からたくさんの方が訪れ、あたたかな陽光のもと、池の鯉に餌を与えたり、写真を撮られたり、お弁当を食べたりしながらゆったりとした時の流れを楽しんで

おられます。

知人や友人たち、訪問される方々とお話ししてよく話題になるのは、「この「陽明園」って中江藤樹記念館の施設の一部やったん？知らなかった。全く別の施設の庭やと思っていただわ。」ということなんです。恥ずかしながら、私自身も実はつい数年前まで中江藤樹記念館と「陽明園」は隣接していることは知ってはいましたが、記念館の施設の一部であることを知らなかった一人です。この機会に「陽明園」の概要を少し知っていただき、お天気の良い日等に是非とも訪問いただき、中国文化の一端にふれていただければ幸いです。



す。心からお待ちしています。なお、「陽明園」の入園料はいただいております。併せてお知らせします。

以下、本館リーフレットから「陽明園」の概要を抜粋し、紹介します。

【陽明園】

昭和六十一年からはじまった王陽明（1472-1528【明代】）の生誕地である中国浙江省余姚市と、日本陽明学の祖・中江藤樹（1608-1648）生誕の地である滋賀県高島郡安曇川町（平成の市町村合併前）の友好交流シンボルとして建設された中国式庭園です。設計に際しては上海の豫園、蘇州の拙政園や留園など、中国における代表的庭園を参考にしました。「太湖石」と呼ばれる池の周囲などに配した奇怪な形をした岩石や塀の「龍瓦」をはじめ、陽明園に用いられている建築材料のほとんどは、中国から輸入したものであります。

工事が着工されたのは平成三年十二月十八日、竣工は翌平成四年九月三十日、そして開園されたのはその年の十月二日でした。総敷地面積は千八百㎡、総事業費は二億四千万円の大きな規模の工事でした。